

東北漫歩

(秋田縣の卷)

和泉生

神祕と豪壯雄大の十和田湖を、さよなら展望する發荷峠に差懸ると、追に名残りが惜まれいつまでもいつまでも佇んで居たい魅惑を感じる。此の峠を振出しに整然たる路肩

帯で掃き清めた様な路面が展開し、これでも砂利道かと疑ふ程で、舗装道路と比較して何等遜色が無い。寧ろ柔和な

感觸が湧き、舗装道路以上だと、お世辭の一つ位惜まぬ衝動が伴ふ。舊進する自動車は速い。盆踊りで有名な温泉郷

大湯町も瞬く過ぎて花輪町に達するが、大通の一部は幅員

狹隘の爲車の交換に一汗かかされる。人家連櫓の關係上擴

築は相當困難だらうが、此儘放置したら折角の金看板が泣くだらう。縣内の幹線だけに、此の箇所が強く峻に焼附くのは寂しい。やがて湯瀨の湯の香が鼻を衝くと、涯し無き

砂漠にオアシスを發見したキヤラバンが、連日の疲勞と苦惱を憩ふ劇的な心情が偲ばれる。

湯瀨温泉が天下に紹介されたのは、昭和七、八年頃で、それ迄は附近農民等の湯治場に過ぎなかつたが、現湯瀨ホ

テル主人關直右衛門氏が、參拾餘萬圓の巨費を抛て、本館別館及新館を新築し、茲に大湯瀨温泉の威容が完備され、

秋田の湯瀨より一躍東北の湯瀨となり、そして日本の湯瀨としての飛躍は國有鐵道の開通もさること乍ら、凡ゆる設

備の粹と附近の溪谷美に俟つところが多い。春の櫻花佳く、夏の河鹿の音も楽しく、雪の炬燵酒も亦興深いが、秋の満

山紅葉は一大美觀である。
關氏は、明治六年生れだが元氣一杯だ。裸一貫より身を

起し、二十七歳の時土木請負監督として單身北海道に乗込んだ風雲児であるが、苦闘數十年遂に酬ひられ現在では、樺太、北海道、岩手縣の各地に於て木材業を經營し、尙近く開業の秋田縣營十和田ホテルをも切廻す段取だそうだ。

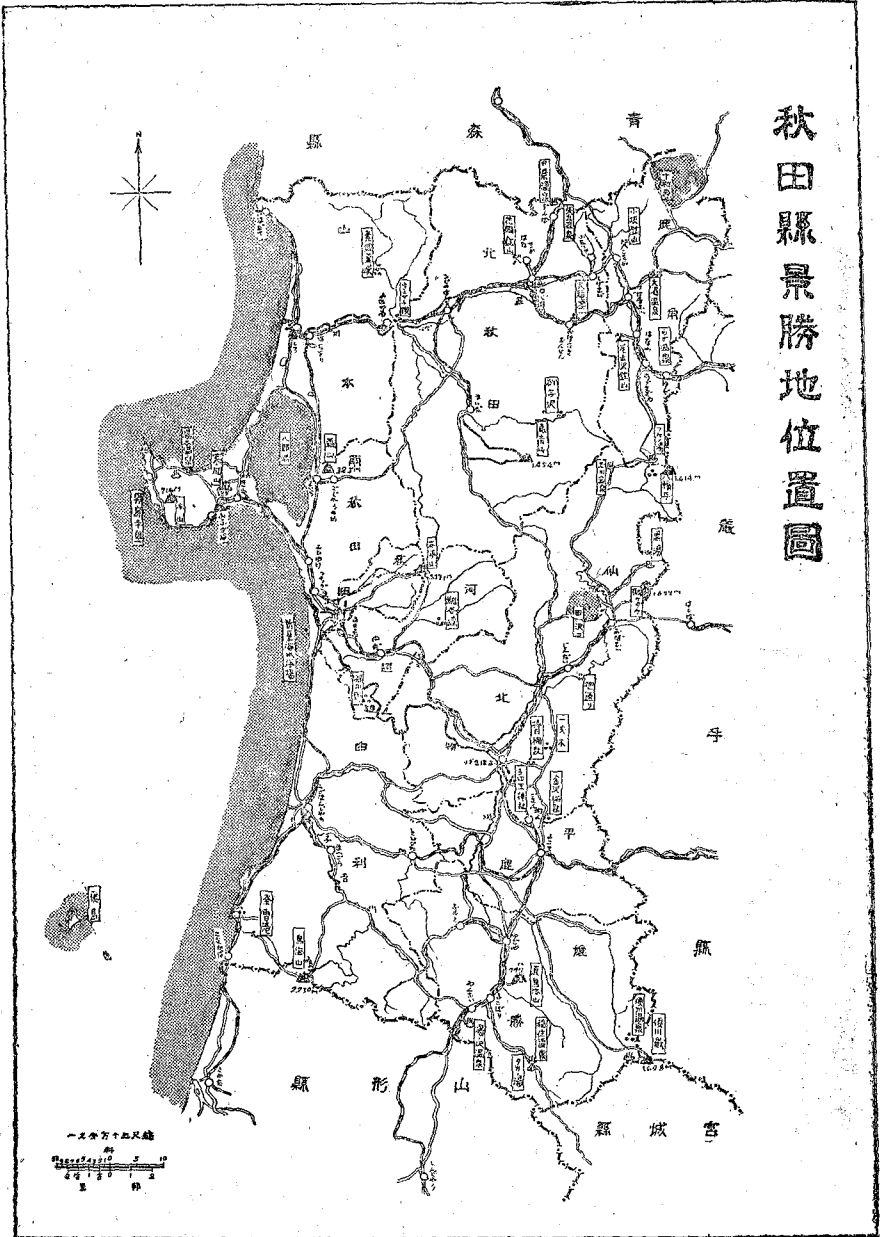
關氏は感心な人で、湯瀨溫泉發展の爲道路の改良に勤からぬ援助を受けたとの理由で、昭和九年に貳萬五千圓、十年に壹萬五千圓、十一年には壹萬圓計五萬圓を、道路改良費として縣に寄附した篤志家である。秋田縣の道路が今日の地位を占むるに至つた陰に、斯うした花も實もある力強い人の存在を没却してはならない。

湯瀨溫泉から田澤湖方面に抜けるには、奇勝八幡平はちまんたいを経由するのが名實共に最良のコースであるが自動車の運行を許さない。八幡平は、海拔壹千六百六十六米の廣漠たる一大高原で高山植物の群落を以て蔽れ、其の景趣と眺望の雄大さは驚嘆に値する。近年夏季の登山者激増し、冬季にはスキー場として愛賞されてゐる。附近一帯は幾多の溫泉を抱擁し、不妊症には靦面に利くと言ふ蒸湯かづの湯を初めとし、後

生掛、藤七、玉川、鳩の湯等十有餘を算する。最近婦人雜誌に盛に廣告してゐる洗顏料「湯瀨洗粉」及家庭浴劑「玉川湯花」は共に此の地方の特産である。湯瀨溫泉と田澤湖を結ぶにはどうしても、此の間の道路の改良が焦眉の問題だ。東北振興事業として銳意之が工事を急いでゐるが、一箇年度參萬圓位の端金では、二十五年目にやつと完成する勘定になる。時局柄種々の障碍と犠牲は免れぬであらうが一大觀光地たらしむべく官民の協力と邁進が緊要だ。

田澤湖は水深四百二十五米、本邦第一位と稱し、透明度は世界無比である。湖中の勝景凡て幽潭重淵、峭峰層巒の間に在り、一度舟を浮べて湖神辰子の仙姿玉容を想望せむ乎、瓢々乎として仙路遠からざるを覺ゆるであらう。湖上遊覽は四時間が普通だ。鏡の如き清澄水で磨き立てる勢でもなからうが、こちら邊りが「秋田美人」の本場であり、「秋田おばこ」の發祥地でもある。秋田おばこを聞かぬ人はなーんだ、おばこ節かとあつさり片附けるだらうが、東京くんだりで怒鳴つてゐるおばこ節は、山形縣の酒田おば

秋田縣景勝地位置圖



こで秋田おばこではない。相當の苦勞人でないとあのサビの乙がびつたり來ぬと思ふ。然し酒田おばこが、秋田おばこの先祖だとの説もあるが、出藍の譽なんて文句がある以上左程苦にすることもあるまい。湖畔から生保内^{なまほ}に出て南下すると、東北耶馬溪の稱ある「抱返^{なまがへ}溪流」に心惹かれ、一日を棒に振りたくなるのは人情だ。山陽が餘りの絶景に感慨無量の筆を投げた本物の耶馬溪も顔負けするに違ひない。それから大曲町に突當ると五號國道だ。國道に沿ふて十軒餘、後三年の役の史蹟地金澤町に着く。金澤の柵趾は源義家に攻略せられて樓閣灰燼に歸し、既に九百年の星霜を閲したが、今尙本丸初め古史を物語る舊蹟多く、當時を偲ぶに難くない。横手町は縣南の首都であるが、舊七月十六日の送り盆行事と花火大會、春秋に催される奇習、若衆市、民謡「岡本新内」等郷土色豊である。

せめてひと夜さかりねにも

妻と一言いはれたら

この一念もはれべきに

説 苑

どうした因果か片思ひ

嫌がりしやんす顔みれば

私しや愚痴故なほ可愛い

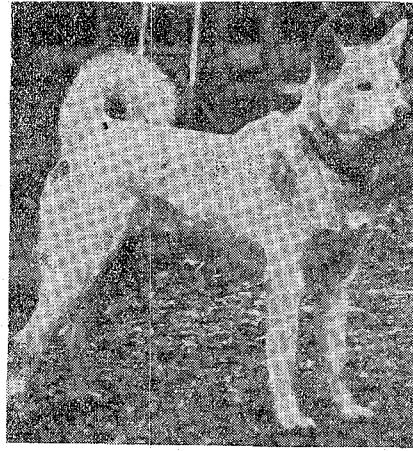
岡本新内の一くさりであるが、心臓の弱い人はぼーつと照れそうだ。銘酒「爛熳」と「兩關」で馳名を馳せる湯澤町を滑ると横手、院内町で、秋田山形兩縣界に跨る雄勝峠が浮城の様に聳えてゐるのが面憎い。雄勝峠の改築は、政府多年の懸案であり、地元民の要望切なるものが伺れるが、巨額の工事費と技術的攻究は之が實現を澁滞せしめてゐる。昭和八、九、十の三箇年度に互つて、福島山形兩縣界の栗子峠が劃期的事業として竣功を見たるに照し、雄勝峠の貫通は五號國道の全通を約するものとして意義深いものがある。附近には多數の温泉郷が點在してゐるから、着工の機運が訪れても、工事關係者に退屈させる懸念は更々無からう。殊に横堀町から稻住温泉迄は、東北振興で立派すぎる温泉道路が出来上つたから浴客は日々に増加の傾向を辿つてゐる。之でお酌の屯所でも新設されたら物凄い發展は保

證附だ。

昭和七年度より昭和十三年度に至る七箇年に、直轄工事に要した費用は、壹百九拾五萬六千圓であるが、其の内橋梁費が壹百參拾壹萬圓の多額である。則ち秋田大橋七拾萬圓、岩崎橋拾六萬圓、長木橋、須川橋、萬石橋が各拾五萬圓で、此の難物五橋の新装に依り、縣内の主要交通は一段の牙を發揮し、優秀なる道路の維持修繕技術と相俟つて堂々天下に君臨してゐる。府縣道改良費は、東北振興事業の分が昭和十一年度六拾萬參千圓、十二年度六拾參萬參千圓、十三年度四拾八萬圓、十四年度參拾七萬參千圓計貳百八萬九千圓であるが、山間部の資源開發に主眼を置いてゐるのが注目すべきだ。秋田縣ばかりではないが、東北各縣の昭和十四年度府縣道改良費が著しく減少したのは、今次事變の影響に依り已むを得ないと諦めればそれまでだが、軍事施設の整備、銃後生産力の擴充等、現下時局の要求に即應し緊急改良を必要とする箇所が、無數に残存してゐるにも拘らず、之が苦衷を中央部に訴へなかつた各縣當局の不誠

意は、遂に東北振興の旗印に泥を塗り潰す痛恨事を招來してしまつた。然し秋田縣由利郡矢島町長大井直之助氏及縣會議員關威氏の兩人が、去る二月下旬遅崎き乍ら地元民の願望と期待を擔つて、工事の繼續執行を具に當局に陳情し、孰れも其の目的を貫徹せる熱意こそ、東北振興の眞意義を地方民に覺醒せしむる警鐘と賞しても過言ではなからう。湯瀨溫泉から秋田市に出るには大瀧溫泉を經由するのが順路だ。曾て藩主佐竹侯が年々入湯保養するを恒例としたと傳へられてゐるが凝しい。隣りの十二所町には、秋田犬の傳説を誇る老犬神社がある。三百餘年の昔、左多六と申す獵師が愛犬「白」を伴ひ、獲物を追ふて知らず知らず三戸領に踏み込み、役人の殿しい詰問に責められた。白は一大事と主家に飛び、秘藏の狩獵免許證文卷物を首に掛け一路三戸領に馳せ參じたが、哀れにも主人は刑場に非業の最後を遂げてゐた。白は無慘にも捨てられた主人の遺骸を雪に埋め、峠に近い山上から盡きぬ哀怨の遠吠を幾日も幾日も續けた。この悲運の主家に殉じた忠犬白を村人達は、老

犬様として祀るに至つたのである。秋田犬は立耳、巻尾の外に體驅の巨犬であることを特徴とするが「一代一主」の特性は秋田犬にのみ觀られる現象であらう。東京市澁谷驛頭の「ハチ公」の銅像史は、當時新聞を賑はしたから今更燒



秋田縣八木氏愛犬

直しは無駄だ。秋田犬は大館犬とも稱し、代表的の大部分は縣北の都邑大館町に集つてゐる。昔、大館の領主が犬を好かれた結果侍共も競ふて犬を飼ひ、夜覆面して犬を闘はし往々明方に及んだ。當時お城の一角虎御門の邊は、よく其の爲に利用され「大將は、繩で下知する虎御門」と言ふ川柳めいたものも生れた。上の好むところ

下に及び、一般町人百姓にも此の風習が擴まつたが、侍達の犬には到底勝てなかつた。明治維新の役で戦火の巻と化し、以後士族側の犬も減少して一般人の犬熱が旺盛を極め、明治十八年初めて官の許しを得て、闘犬公開の時は大館町を中心に百數十頭を算した。現在闘犬種八十頭、和犬十頭内外を數へる状況であるが、この十頭足らずの和犬秋田犬が種屬保存の大旗の下に、今日迄命脈を繋ぎ得たことは大に天下に氣を吐くもので、國家の天然記念物としても亦土地の歴史的記念物としても眞に捨て難いものである。尙秋田犬の豪勇譚は珍らしくないが、生れは安政の末、戊辰の兵火から逃れ明治四、五年頃迄生存した「モク」は、大きな小馬の如く駆ける時は地響きがし、二疋や三疋で對抗しても及ばず、小供二人を乗せてどんどん走り、十七歳の青年を近在迄乗せて行つたこともあつた。大人が乗つても潰れず、近在の村々の壇家から米を運ぶのに、二斗入りの袋を一つづつ左右に掛けてよく一里の道を歩いたこと等、秋田郷土叢話に載つてゐる。

大館町の東北方矢立峠の温泉や相馬大作の遺蹟巡りを避けて、長江米代川の清流に沿へば七座村の俵后坂に臨む。

明治十三年、斷岩絶壁を開鑿した新道であるが、翌十四年九月、明治天皇東北御巡幸の際此の地に御休憩遊ばされ、俵后坂の名を賜ふ由緒の勝地である。時の石田縣令は、杉宮内大輔より此の由を承り、縣民の光榮として恐懼感激したと謂ふ。續いて、日本海に面する諸港の中最も古き歴史と、秋田杉の主産地として名聲高い能代港町は、元祿寛永の大地震迄は野代と書いて居つたが、野に代ると言ふ縁起を擔いで此の名を忌み能代と改名したそうであるが、昭和年代だけでも五回の火災に見舞はれ、約八百戸を烏有に歸してゐるのはどうかと思ふ。もう秋田市へは一本道であるが、右側に見ゆる八郎瀉の傳説は語らずばなるまい。青年八郎は大湯村の草木を出生地と聞く。孝心厚く村民羨望の的となつて居たが、十和田山へ出稼中イワナと言ふ魚を喰ひ過ぎたのが原因で、三十三晝夜水を汲み續けて三十三丈の蛇身と變じ、遂に淨々たる水を湛へて一大湖水を造成し

たのが十和田湖の最初である。然るに諸國修業の僧南祖坊なる者在り。紀州熊野の權現堂に祈願し、己が住所を興へ賜へと七日七夜の苦行を積み、一足の金の草鞋を授つた。

曰く「此の草鞋を穿いて歩き、而して切れたる所が汝の住所ならん」と。南祖坊十和田に來りし時穿ける金の草鞋がぶつり切れた。はつと南祖坊、熊野權現のお告げを思ひ出し、十和田湖底深く飛び込むや八郎と七日七夜の葛闘を演じ、遂に法華經の法力に依り八郎を屈伏した。敗慘者八郎は住むに家無く、流れ流れて來たのが八郎瀉であるが、間もなく八郎瀉を追放され、男鹿半島の突端一目瀉に、自ら射放したる矢に左眼を失ひ薄命の一生を終るに至つた。

日本海の荒浪に屹立する一大半島男鹿は、西南北の三面は海に面し東は八郎瀉に界してゐる。奇巖怪峭錯在し、荒れ狂ふ波濤の碎くる態は豪快無双の限りである。島の都船川港町は、漁師達にとつて凡ゆる意味の本據で、花柳界の豪華振りが一際目立つ。板一枚が地獄の底の彼等には、こうした慰安所があつてこそ生甲斐もあると言ふものだらう。

「三十五反の帆を巻きあげて、ヤンシヨヤンシヨ、沖で浪風あふたとき、最早船乗りやめよかと、とは言ふものの船川に」の船川節は遺憾なく情緒を煽つてゐる。濱藝者の土崎港町に未練をかけ、八橋油田の石油樽の林立を仰げば、もう佐竹家二十萬五千石の城下秋田市だ。慶長七年佐竹義



宜常陸より遷封さるるや茲に城を築きて三百年、居城趾千秋公園、藩主佐竹家累代の廟所天徳寺、三吉神社の梵天等今尙多くの俤を留めてゐる。

秋田美人と秋田蕎は餘りに人口に膾炙されてゐるが、蕎

秋田美人と落

の莖は柱の如く、葉は傘の如く、其の丈は八九尺に至るものがある。享保年代、藩主佐竹義峰侯、江戸城大廣間に於て會談中、偶々話が領内の名産に及んだ時、義峰侯は北秋田郡長木澤の蕎の莖が太さ七年竹の如くであり、葉は傘と同様だと得意満面だつた。ところが同席の松平安藝守が左様に大きな蕎があるべき筈がないと嗤つたので、義峰侯は怒髪天を衝き當に大事に及ばんとした。幸ひ人あつてこれを止めたが納らないのが義峰侯だ。歸邸の後密に秋田に飛脚を馳せ長木澤の蕎を取寄せせるや、早速大目付役寛播磨守及松平安藝守其の他を招待した。書院の床の間には大蕎を植えた鉢を据へ料理も蕎を主とした調理を饗應し、安藝守に一本参らせた逸話もある。美人の溜りは何と言つても旭川に沿ふ花柳界川かわばた反通りに止めを刺す。料亭初め、ネオン煌くカフェー、バー等軒を並べてゐる。美人は粒選りで大小百餘、旅人よ酌んで行かんせひとよさを、そして雪の肌なる秋田美人の熱き人情をと口説かれては、南蠻鐵のよな男でも、浮世離れて奥山住ひもしてみた

くなるだらうし、竹の柱に茅の屋根で一苦勞しようかとお心亂るるのも尤も至極。酒は「新政」が随一だ。夜明しをやつてもアタピンにならぬそうだ。それ故身の毒と知りつつ深酒をやる。罪な酒ではある。「あきたどころか酒こよいとて、上戸はニコニコだ、嫁このお酌でほろりと酔ふたら極樂ここだべが」の秋田音頭は秋田辯丸出しで面白い。

秋田市から海岸線に寄ると、合歡の花咲き薫る縣内唯一の溫暖地象潟町がある。俳聖芭蕉翁をして「松島は微笑むが如く象潟は怒むが如く男鹿は怒れるが如し」と絶讃せしめた如く、往古の象潟は松島と並稱せられた佳景であつたが、文化元年の大地震に地殻八尺餘も隆起して、八十八潟の長汀白沙を埋没し、今は纔に田面の中に青巒の殘島が其の佛を止めてゐるに過ぎない。親鸞上人が「松島や雄島鹽釜見つて來てここに哀れを象潟の浦」と詠嘆してゐるのは頷ける。しかし五月雨頃の象潟を、渚の怪峭に打寄す波濤、碧空に聳ゆる鳥海の雄姿、海上遠く飛島の影と併せ觀る時轉た惆悵懷古の情に堪へざるものがある。閑院宮家祈願所

皇宮山蚶かんかん滿寺は、仁壽年間慈覺大師の開基に係るもので、大師自刻の地藏尊を安置する外幾多の珍什寶物を藏し、最明寺時頼、西行法師、芭蕉、能因法師に絡む古事の一頁を繙くのも懐しい。

秋田縣の劣惡道路の改良には、歴代の土木課長が血みどろになつて努力してゐる。従つて民間の道路愛護熱も旺盛で、現在愛護團體の數が百四十一に達し、其の實直と勤勉さには今日の大成を俛たばしめるものがある。道路工夫必携の作業要項には、極めて平易な文章を列ねて道路工夫たる者の心得を訓へてゐる。則ち道路工夫は道路を良き状態に維持する第一の立場に居る人であるから、自分の受持道路の上司の指示のあるなしに拘らず、常に「サツパリ」とした道にする様手入せねばならぬ。

「サツパリ」した道を作るには
 第一 雨水が路面に溜つたり、水道を作る様なことのない様に側溝を作ること、即ち常に側溝を浚へ路面に凹凸の出來ぬ様にし、うまく蒲鉾形を保つ様に手入すること。

第二 道路の弧形が瘦せて居てはいけなから、ふつくりと肥えて居ること、即ち手頃の蒲鉾形を保つこと。

第三 路肩の整理されて居ること、兩肩がすつきりと際立つて居ること、即ちだらしない肩崩れがあつてはならない。

第四 敷砂利はなるべく小雨又は雨後に敷く様にして早天はなるべく避けること。

第五 法草や路肩の草や掩ひかぶり木枝垂等の道路に何となく鬱陶しい氣分を與へるものは取除き、通る人に晴れはれしい氣分を與へる様に手入すること。

以上の様にするには材料も必要だし人手も必要だ。しかしながら、道路工夫は材料を使用するにも人手を使ふにも、餘程注意儉約して無駄使ひせぬ様に氣をつけねばならぬ。

全く痒い處へ手が届き過ぎ、些か廻り諷い書方だが、道路工夫達は何れも孜孜として働いてゐる。秋田縣内を視察する人々の眼に先ず映するのは、道路工夫の眞摯な姿であるとの話題は、私も數回の旅行により心の奥深く刻みつけられた好印象として忘れ得ぬ事實である。前土木課長高田

廣氏が管内の道路視察には、必ず自動車を停めて彼等に心からの「御苦勞」の一言を惜まなかつた相であるが、彼の温厚を證據立てる麗しい一片として賞すべきだと思ふ。後任者佐藤東次郎氏は故郷へ錦を飾つた幸運兒であるが、榮轉早々昭和十四年度道路維持修繕費を削減され多少クサつて居た様だ。然し彼の意氣を以てすれば、來年度に於ては必ずや之が復活を實現せしめるであらうことを期待する。道路維持修繕費の削減は些か打遣りの感無きにしても非ずだが、あれまで押し込んだ頑張りには敬意を表したい。

前經濟部長は現東京府學務部長、酒井榮吉氏であるが、土木に造詣深く且非常な熱心家で、青森縣經濟部長手島氏と共に、東北地方の双璧であつた。酒井氏に去られた土木關係者の落膽が思ひやられ同情に堪へないが、關東州廳内務部長白石喜太郎氏を後任に迎えたことは頼母しい。白石氏の豪放磊落と佐藤氏の熱血のコンビが、秋田縣土木史に如何なる異彩を放つかが心待たれる。

(完)